

横截五惡趣章(二帖第四通)

それ、^{みだに}彌陀^に如来^{よらい}の^{ちようせ}超世^の本願^{ほんがん}と申すは、^{まっだいじよくせ}未代濁世^の
^{そうあくふぜん}造惡不善^の・われらごとき^の凡夫^{ぼんぶ}のために・おこしたまえる^{むじよう}無上^の
の誓願^{せいがん}なるがゆえなり、しかればこれをなにとように^{こころ}心をもち。
なにとように^{みだに}彌陀^{しん}を信じて、かの^{じようど}淨土^{おうじよう}へは往生^{もう}すべきやらん・さら
にその^{ぶんべつ}分別^{なく}なく、くわしくこれをおしえたまうべし、
答えていわく・^{まっだいいま}未代^{とき}今の^{しゆじよう}時の^{ひと}衆生^は、ただ一^{みだに}すじに^{よらい}彌陀^に如来^{よらい}を
たのみたてまつりて・^よ余^{ぶつ}の^{ぼんざつとう}仏菩薩^等をもならべて^{しん}信ぜねども、
一心^{いっしん}一向^{いっこう}に^{みだに}彌陀^{いち}一^{ぶつ}仏^{きみ}に^{きみ}歸命^{よう}する^{しゆじよう}衆生^をば、いかに^{つみ}罪^なふかくと
も・^{ぶつ}仏^{だいじ}の大^{だい}慈^ひ大^{だい}悲^ひをもつて^{ちか}すくわんと^{だい}誓^{ちかう}いたまいて、^{みよう}大^は光^な明^はを^は放^な
ちて・その^{こうみよう}光^は明^なのうちにおさめとりましますゆえに、この^{きよう}こころ^なを^な經^な

には、^{こうみやうへんじょうじっぽうせかい}光明遍照十方世界・^{ねんぶっしゅうじょうせっしゅうふしや}念仏衆生撰取不捨と説きたまえ
り、されば、^{ごどうろくどう}五道六道といえる^{あくしゅう}惡趣にすでにおもむくべきみち
を、^{みだに}弥陀如来の^{がんりきふ}願力の^{ふしぎ}不思議として、これをふさぎたまうなり、
このいわれをまた^{きょう}経には、^{おうせつごあくしゅうあくしゅうじねんべい}横截五惡趣・^と惡趣自然閉と説かれ
たり、かるがゆえに^{にようい}如来の^{せいがん}誓願を^{しん}信じて、^{いちねん}一念の^{ぎしん}疑心なきとき
は、いかに^{じごく}地獄へおちんとおもうとも、^{みだに}弥陀如来の^{せっしゅう}撰取の^{こうみやう}光明に
おさめとられまいらせたらん身は、わがはからいにて^{じごく}地獄へもおちず
して、^{ごくらく}極樂にまいるべき^み身なるがゆえなり、かようの^{どうり}道理なるとき
は、^{ちゅうやちようぼ}昼夜朝暮は、^{によういだいひ}如来大悲の^{ごおんのあめやま}御恩を^{あめやま}雨山にこうむりたるわれら
なれば、ただ口につねに^{しやうみやう}称名をと^ぶとなえて、かの^ぶ仏恩を^の報謝のため
に、^{ねんぶつともう}念仏を申すべきばかりなり、これすなわち、^{しんじっしんじんの}眞実信心をえた
る。すがたといえるはこれなり、

あなかしこ あなかしこ

(不読)

文明六年、二月十五日の夜、大聖世尊

入滅の昔をおもいでて、灯の下に

おいて老眼を拭い筆を染めおわりぬ

満六十 御判

横截五惡趣章の大意

阿弥陀如来の本願が世に超えすぐれているというのは、よごれ
まった末法の世で、迷いの罪をつくり続ける私たちを救うために

おこされた、この上なくすぐれた誓願であるからです。

それでは、どのようにこの本願を心得、どのように阿弥陀如来を信じて浄土に往生するのでしょうか。このことをくわしく述べましょう。末法の世に生まれた今の人々は、他の神や仏をたのみとせず、ただひたすら阿弥陀如来に帰命すれば、どれほど罪が深くとも、み仏は大慈悲をもって、光明の中におさめとってくださいます。このことを『観経』には、「光明遍照十方世界 念仏衆生 攝取不捨」と説かれています。また、如来の本願の不可思議なはたらきによって、迷いの世界への道をふさいでくださいます。それを『大経』には、「横截五惡趣 惡趣自然閉」と説かれています。如来の本願を信じて少しも疑いの心がないならば、たとえ地獄へおちる身であると思っても、阿弥陀如来の光明におさめとら

れたものは、地獄におちず極樂に往生する身となるのです。

このように、如来の大慈悲のご恩を帝におおいにうけている身ですから、いつも念仏して仏恩に報じなければなりません。これが眞實信心を得たすがたです。